

平成29年度中学生・高校生の国際理解・国際交流論文
高等学校の部 最優秀賞



平和への祈り－禎子さんの折り鶴－

福島県立会津農林高等学校

3年 中川 夏帆

「原爆の子の像」は、戦後72年たった今日も広島町を見つめている。私は折り鶴を折る時、一人の少女を思い出す。「原爆の子の像」のモデルになった佐々木禎子さんだ。禎子さんは被爆により、原爆投下の10年後に白血病で亡くなった。私が彼女を知ったのは小学6年生の時だ。英語の教材で彼女の生涯が紹介されていた。禎子さんの生涯を知った時、たまらなく苦しい気持ちになったことを今でもはっきり覚えている。私がなぜこんなにも苦しい気持ちになったのかというと、禎子さんが亡くなったのは当時の私と同じ12歳だったからだ。友達と会えない、学校に通えない、生きてくても生きられない。白血病と診断された時点で、当たり前だと思っていたことが当たり前ではなくなったのだ。私が禎子さんだったら、と重ねずにはいられなかった。しかし、苦しい入院生活だけが禎子さんの生涯ではなかった。禎子さんの生きる希望や、病気に勝つという気持ちを奮い立たせたものがある。それこそが「原爆の子の像」の少女が手に掲げている折り鶴なのだ。禎子さんが亡くなるまでに作った折り鶴は千羽以上にのぼる。禎子さんは病室での時間をただ潰すために折り鶴を作っていたわけではないと思う。病気を治したい、何より生きたいという心からの願いが、一羽、一羽に込められていると感じる。その折り鶴が今では、核のない平和への祈りとなり、世界中へ届けられているのだ。

今年8月6日にアメリカと日本の壁をまた一つ壊し、日本中を驚かせた出来事があった。第二次世界大戦中に爆撃訓練が行われ、広島に原爆を投下したB29爆撃機「エノラ・ゲイ」の格納庫が残る米ユタ州のウェンドーバー空軍基地跡の博物館に、禎子さんの折り鶴が寄贈されたのだ。つまり、広島に投下された爆弾を搭載した爆撃機が飛び立った場所に、折り鶴が寄贈される日が来たのだ。式典には禎子さんの甥の祐滋さんが出席した。祐滋さんは、「かつてエノラ・ゲイが飛び立った場所に折り鶴を贈り、平和を訴えることはとても意義がある。」とおっしゃっている。折り鶴を寄贈したことには賛否両論ある。しかし、戦後間もない時だったらどうだろう。寄贈されることがあつたらうか。戦後、人々が平和を願う気持ちは強くなったはずだ。だが、戦争を経験していない私たちは、昔悲惨なことがあつたということを知ってはいても、本当の恐ろしさは分からない。今年6月に、NHKが18・19歳を対象に行つた世論調査では、日本が終戦を迎えた日について、14%もの若者が知らないと答えた。平和なゆえに戦争があつた事実、過去を忘れてしまうこ

とが、今を生きる私たちにとって一番恐ろしいことなのかもしれない。

昨年5月27日に広島市の平和記念公園で、当時のアメリカ大統領バラク・オバマ氏がスピーチを行った。現職の大統領が広島で戦没者を追悼することは史上初めてのことであり、日本だけでなく全世界から注目を集めた。核保有国でありながら核なき世界を訴えるオバマ氏の姿は大きく、二度と戦争を起こしてはいけないという大きなメッセージになったと思う。そしてオバマ氏と被爆者が抱き合い、涙を流したことは一生忘れられない。この涙は、72年前の憎い、悔しいの涙ではないのだ。安らかできれいな涙なのだ。お互いを殺め、傷つけ合った国同士が手を取り合った時、戦争とは何かを考えていかなければならない。

原爆で亡くなった方は広島だけで約14万人。正確な数は今も分かっていない。禎子さんのように10年、20年後に被爆による病で亡くなった方は少なくない。「ヒバク」という言葉など、原爆の話でしか聞いたことがない。そう思っていた。しかし、2011年3月11日に私が住む福島県は、東日本大震災の原子力発電所の事故により被曝地となった。放射性物質は思った以上に脅威的で、今も故郷に帰れない人がたくさんいる。帰れないどころか、もしかしたら禎子さんのように、月日を経て放射線の影響がでる人がいるかもしれない。そんな不安が頭をよぎった。決して人事にはできないのだ。

復興の為にはどんな小さなことでも考え、できることから始める、それが復興の第一歩になる。禎子さんが亡くなった後、同級生や家族が懸命に募金活動を行い、3年後に、広島市の復興と犠牲者への追悼、平和への願いが込められた「原爆の子の像」が建てられた。なぜ禎子さんが平和の象徴として、多くの人に平和を訴える力があるのだろうか。それは、学校で友達と遊んだり、勉強したり、笑い合ったりする普通の女の子だからだと思う。彼女が抱いていた夢、未来がすべて戦争で奪われた。禎子さんだけでなく多くの女の子が戦争の犠牲になったのだ。普通の女の子が望んでいいはずの夢、未来、生きたいという願いを、「戦争」という「人の手」によって奪ってはいけないということを、禎子さんの折り鶴はこれからも語り継いでいこう。

戦争で生き残った方々の平均年齢は80歳を超える。戦争のことを思い出すだけでも辛いはずなのに、経験者は語ってくださる。ある一人の被爆者の話を伺う機会があった。なぜ語ってくださるのか伺うと、「生き残った私の使命であり、私の戦争は死ぬまで終わらないからよ。」そうおっしゃった。生き残った者の宿命、戦争は終わっていない—この時、私の心の中で多くのことが重なった。震災のことから目をそらし、無意識に忘れようとしている自分がいた。しかし、過去から目をそらすことは決してできないのだ。戦争の過去を忘れず、また震災の記憶を語り、未来につなげていくことが私たちの使命だ。そして、禎子さんのように平和を心から願える人に、命の尊さ、当たり前の生活を大切に思える人に私はなりたい。

世界中に届けられた禎子さんの一羽一羽の小さな折り鶴は今、全世界を核のない平和な未来へと導く一筋の光となっている。いつか、世界中が平和の色へと満たされますように。